



若松城天守

この百五十年の間に、戊辰戦争や会津藩に対する受け止め方には、かなり変わったところもあります。相変わらず旧態依然としているところもあると感じています。

まず変化のあったところから紹介しますと、旧長州藩領である山口県周南市に、入手し難くなった歴史史料を復刻して菊池寛賞を受けたマツノ書店があります。その社長、松村久氏はこの十年ほど、会津藩の幕末史料『京都守護職始末』や『会津戊辰戦史』など十数

点を復刻し、大好評を博しました。旧長州藩領でも貴重な会津の史料を残そうという動きが顕著になったわけですが、史書の世界では会津藩関係が長州藩関係の史料を圧倒する売れ行きを示しています。

逆に旧態依然としているところとしては、会津藩に対する誤解がまだ一人歩きしているケースが散見されることです。



保科正之

## 一保科正之の功績

会津藩の歴史を振り返る場合は、何よりも初代会津藩主・保科正之の政治の見事さを頭に入れてほしいと思います。

保科正之は寛永二十年（一六四三年）に会津入りすると、まず年貢率を下げました。さらにユニークなのは、藩士達への俸給である米の渡し方を変えた点です。それま

で上級藩士は米をもらうのではなく、「知行取り」といって知行所として農地をもらっていました。その知行所内で年貢高を勝手に高くして農民を苦しめることもできたわけですが、そこで保科正之はこれを廃止し、領内から集められた年貢米は全てを一旦、藩の米蔵に入れて、そこから藩士たちに蔵米と



直木賞作家  
 中村彰彦氏  
 講演会  
 より

# 会津藩の栄光と悲劇の歴史を読み直す 戊辰150年目の視点から

## 中村彰彦氏プロフィール

一九四九年栃木県生まれ。  
 作家。東北大学文学部卒。  
 在学中に『風船ガム』で第三十四回文学界新人賞佳作入選。  
 卒業後一九七三年〜一九九一年文藝春秋に編集者として勤務。  
 一九八七年『明治新選組』で第十回エンタテインメント小説大賞を受賞。一九九一年より執筆活動に

専念する。一九九三年、『五左衛門坂の敵討』で第一回中山義秀文学賞を、一九九四年、『二つの山河』で第百十一回（一九九四年上半期）直木賞を、二〇〇五年に『落花は枝に還らずとも』で第二十四回新田次郎文学賞を、また二〇一五年には第四回歴史時代作家クラブ賞実績功労賞を受賞する。

近著に『会津の怪談』『花ならば花咲かん 会津藩家老 田中玄室』『戦国はるかかなれど 堀尾吉晴の生涯』『疾風に折れぬ花あり 信玄息女松姫の一生』『幕末「遊撃隊」隊長 人見勝太郎』『歴史の坂道』『幕末史 かく流れゆく』などがある。幕末維新期の群像を描いた作品が多い。

## 明治維新150周年と 戊辰150周年

明治維新から百五十年目ということで、関西以西では「明治維新150周年」という表現をよく用いています。関東以北では一般に「戊辰150周年」といってお

ります。戊辰戦争で命を散らした人々を悼むというニュアンスから、「戊辰150周年」と表現した方が味わい深いものがあるように思います。





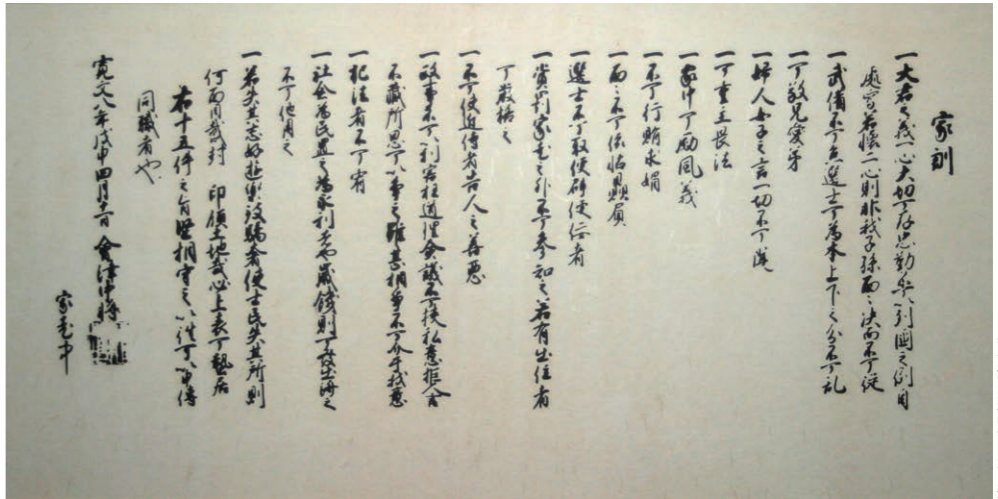
禁門の変四屏風

して分配する方法を取ったのです。

また、社会という名の大きな米蔵を領内各地にたくさん作って米を大量に貯えておき、凶作や飢饉に備えました。これが会津藩の社会制度で、飢饉の年に餓死者が出なかったのはこの制度のおかげです。

さらには身分男女の別を問わず九十歳に達した者には終生一人扶持（一日五合、年に一石八斗）を与えるという国民年金制度を創設しました。また、いわゆる子供の間引きを禁止し、救急医療制度、医療給付制度をも充実させました。

いわば正之は「揺り籠から墓場まで」という福祉政策を充実させ農民を保護するという、時代にまれな善政を行ったわけです。その結果、当時の会津藩の人口は爆発的に増加しました。当時の人口増はそのまま労働力の増加と新田開発に繋がりますから、藩も潤ったというわけですが、その中でも会津藩はあるべき理想的な藩の姿をもっとも良く体現していたと言っていいいでしょう。



会津藩家訓十五箇条

う。

そして正之は自分の考え、精神が間違はなく次の藩主以降にも伝わり、善政が続くようにと願って「会津藩家訓」を残したわけです。

武士の本分である「治にいて乱を忘れず」の気迫の表現でもありました。この辺りから幕府には「困ったときの会津藩頼み」という発想が生まれ、しかも次第に強くなっていきます。

その後、会津藩は文化七年（二八一〇年）から十年間、相模湾の沿岸警備、弘化四年（一八四七年）からペリーが再度来航した安政元年（一八五四）までは江戸湾、南房総の警備を行います。幕末の一八〇八年の戊辰の年から次の戊辰の年（一八六八年）まで幕府の守り、国の安全保障を会津藩が一

## 「討幕の密勅」と戊辰戦争

なぜ戊辰戦争が起こったかというところ、まず薩長同盟が成立したことが大きいと思います。次いで薩長同盟に対して「討幕の密勅」が出され、武力による討幕が朝廷の方針とされてしまいました。

この「討幕の密勅」は、明治天皇の署名や御璽がなく、また文書としての体裁もおかしいため、今日これは、岩倉具視が同志の公家

## 「その後の会津藩

その後の会津藩は、物価の上昇とともに人口も減少傾向に転じたことから、次第に藩財政が傾いてゆきました。そこで五代藩主容頌の時代、筆頭家老・田中玄宰が藩政全般に渡って大改革を断行しました。これが「会津藩の寛政の改革」です。そして五十七万両にまで膨らんでいた借金の返済に目処がつ

いた文化三年（一八〇六年）、幕府から樺太出兵を命じられます。実際に出動したのは、その二年後の戊辰の年でした。

しかも、このとき五百名を出兵せよという幕命に対し玄宰は六百二十名を出兵させています。これは「家訓」にある幕府への諸藩より強い忠誠心を示すと同時に、



松平容保

手に引き受けていたのです。

その後、幕府が鎖国政策から開国策に転じると、外国人への反発から尊王攘夷という考え方が出てきます。そのうちの過激派（尊攘激派）は自分たちに従わない人を「天誅」と称して暗殺に走りましたので、幕府は外憂と同時に内患にも対処しなければならなくなりました。そこで最後の会津藩主・松平容保が文久二年（一八六二年）に京都守護職に指名され、就任したことが幕末会津史に悲劇性を帯びさせる要因となってしまいました。



山川健次郎

な風潮があったというのに、第二次大戦前に文部省は山川健次郎の指摘に反論できませんでした。文部省は沈黙することによって、かえって「討幕の密勅」が偽勅であることを証明してしまっただけですが、明治政府が偽勅がきっかけにできた国家と捉えますと、江戸時代が二百六十五年続いたのに対し、明治以後の国家体制が一九四五年の敗戦によって百年も経たずに壊滅したというのは理の赴くところとも感じられます。

この「討幕の密勅」を奉じて薩摩、長州の兵が京都に入ってくるのと、無用な戦を避けるため徳川慶喜は、大政奉還も終わっていますので、松平容保と京都所司代であった桑名藩主・松平定敬以下とともに大坂城に移ります。



旧幕府側は京都に兵を進めますが、朝廷から「朝命を奉ぜずして兵を擁し上京する者は朝敵なり」と記された文書が届きました。鳥羽伏見の戦いが起こって間もなく、旧幕府や会津、桑名の両藩はこの一言で朝敵とみなされてしまったのでした。

## 順逆史観、差別との戦い

一月六日、慶喜が大坂城から逃亡したことで旧幕府側は敗北し、追討令が発せられました。ここで容保も官位、官職を剥奪され、戊辰戦争が西軍の勝利と確定して以降に順逆史観という筋の悪い歴史観が作られます。明治の初めに薩摩出身や佐賀出身の歴史学者たちが、天皇に従順な者たちが従わない逆賊を討ち果たしたのが戊辰戦争だという意味づけを行っていたわけです。

しかし、戊辰戦争の勝者に属していた佐賀、熊本、長州の者たちが、明治七、八年から不平士族の乱を起こします。これは内乱であり最終的には明治一〇年の西南戦争

になります。この頃から「朝敵回り持ち」という言葉が生まれました。これはかつて官軍と

越列藩同盟に参加した諸藩を貶めた者たちが、今度は賊軍として討たれる運命を辿ったという意味合いです。西南戦争では旧会津藩家老だった山川浩や佐川官兵衛が今度はいずれも活躍したことは良く知られています。

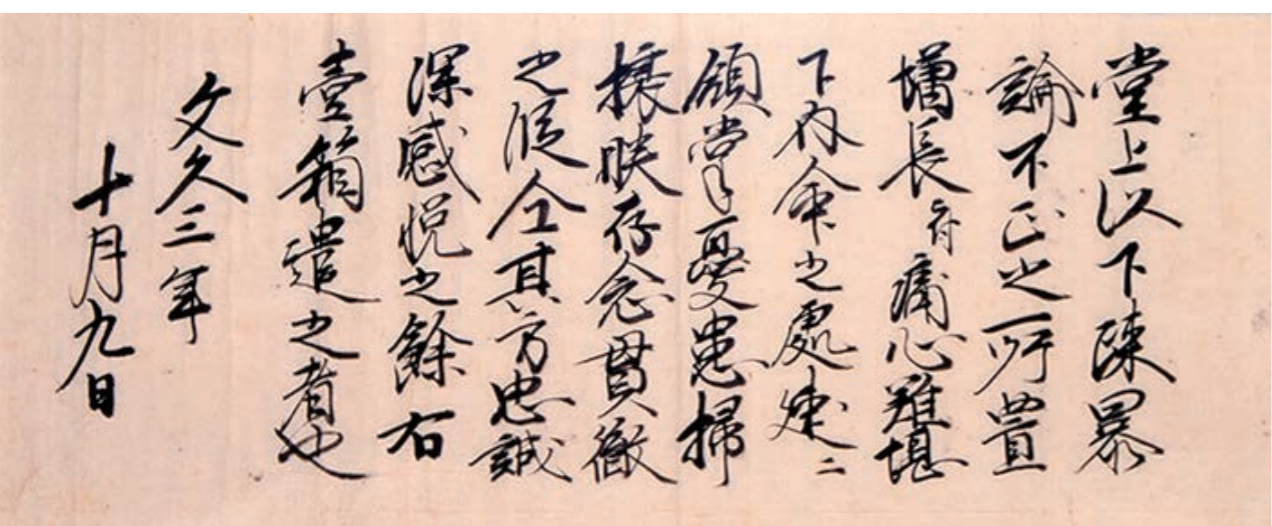
それでも全体としては、残念ながら会津藩出身者に対する差別は続きました。日本陸軍において軍功数多の山川浩や、第一次大戦中の板東俘虜収容所でドイツ人俘虜たちに人道的な対応をし続けた松江豊寿も少



泣血紙（きゅうけつせん）  
会津藩降伏の際に敷かれていた緋毛氈。会津藩士はこれを「泣血紙」と呼び、その悔しさを忘れないようにと誓いあったという。



孝明天皇の賜った御宸翰



将までしか出世できませんでしたが、会津人は少将までしか出世させない、という不文律があったためです。明治の後半以降は、こうした流れに対抗するのが会津人の新しい世代の宿命となってゆきました。

明治二十六年（一八九三年）、松平容保が逝去されます。この時に孝明天皇から賜った宸翰が発見され、これには「その方だけが頼りだ」という意味のことが書いてありました。

このことを、山川浩は『京都守護職始末』を書いて披露しようとしていますが明治三十一年に亡くなり、弟の健次郎がその著述を引き継ぎました。健次郎は時の有力者たちに出版計画を伝えますが、これを出版されるとこれまでの順逆史観が成り立たなくなるので困ると反対され、会津松平家への賠償金を引き出すことと引き換えに出版を見合わせました。

しかし、それから間もなく北原雅長という容保の京都守

護職時代に小姓をしていた藩士が『七年史』という本を自費出版して、その中で宸翰の存在を公にしてしまいました。そこで健次郎も、遠慮することなく『京都守護職始末』を発行することにしました。

幕末の会津藩はひたむきに国家のために尽力した存在であり、朝敵などと呼ばれる筋合いのないことを、これらの史書は見事に証明してみせたのでした。初めにこれらの史書のマツノ書店版がよく売れたという話をしましたが、関西以西には会津藩について、よく知らずに過ごしてきた人々が多いので、ひとつ読んでみよう、という気になったのでしよう。

前後しましたが、早川喜代次さんがまだ白虎隊記念館を開設する前の昭和十五年、教科書改訂運動を行ったことを最後に紹介しておきます。早川さんは松江豊寿やその弟でシュガーキングと呼ばれた松江春次らと、文部省に対して、国定教科書にある会津藩に関する悪意ある表現を改めるよう改訂交渉を行ったことがありました。この改訂運動は全面的に受け入れられ、昭和十六年に認められたので、早川さんたちは大宴会を開いて連

動の成功を喜び合ったといえます。

このように戊辰戦争以降百五十年間の会津史の流れを見てまいりますと多士済々な方々が、それぞれの立場から会津差別と戦ってきたことが再確認できて頭を下げたくなります。

今日の会津若松市はこれら先人達の努力と市民の皆さんの優しい心により、観光客達がたくさんやってくる美しい都市となりました。これからこの町がどう発展してゆくのかわ、私は皆さんと御一緒に見守りたいと思います。御清聴ありがとうございました。



戊辰150周年を迎えるオープニング記念として、平成三十年一月二十八日(日)に会津若松ワシントンホテルで開催された直木賞作家・中村彰彦氏による歴史講演会。中村先生の興味深いお話をたくさんの方々と共有できました。